

5 セロトニン・トランスポーター遺伝子多型は統合失調症関連パーソナリティと関連するの か？

坂戸美和子・坂戸 薫*・村竹 辰之**

染矢 俊幸***

佐潟荘

新潟大学保健管理センター*

新潟大学医歯学総合病院精神科**

新潟大学大学院医歯学総合研究科

精神医学分野***

【背景】近年分子生物学的アプローチが精神疾患の病因や病態の解明の一手法として用いられるようになり、こうしたアプローチはパーソナリティの次元にまで適用されるようになっていく。いくつかの研究では脳内神経伝達物質と関連する遺伝子多型との相関が示唆されており、パーソナリティの生物学的基盤の解明の手がかりを提供される可能性がある。これまで相関があると報告された神経伝達物質の遺伝子多型とパーソナリティとしては、例えば、1) ドーパミン D4 受容体多型と新奇追求性 (novelty seeking) との相関 (Ebstein et al, 1996), 2) セロトニン・トランスポーター (5-HTT) 遺伝子多型と神経症傾向 (neuroticism) との相関 (Lesch et al, 1996), 3) シゾイド傾向と 5-HTT 遺伝子多型との相関 (Golimbet et al, 2003) 等があげられる。

本研究は、ミュンヘン人格検査 (MPT) を健常者に実施し、セロトニン・トランスポーター遺伝子多型 (5-HTTLPR) との関連を検討した。ミュンヘン人格検査は、Zerssen らによって開発された人格検査で、神経症傾向、外向性、欲求不満耐性、硬直性、スキゾイディアの5つの次元の人格傾向を評価する。これは、神経症傾向や統合失調症関連人格を含む包括的なパーソナリティ検査であることから、両者を同時に検討することで、パーソナリティとセロトニン・トランスポーターとの関係をより明らかにする可能性があると考えられた。

【方法】勤労成人 112 名の男性を対象に、5-HTTLPR と各次元の平均得点を比較した。共分散分析 (analysis of covariance: ANCOVA) を用い

て MPT 下位尺度得点と遺伝子型との関連を検討した。

【結果】allele の頻度は L 型 17%, s 型 83% であった。また、遺伝子型の分布は L/L 型 3% (n=3), L/s 型 29% (n=32), s/s 型 69% (n=77) であった。これらの結果は、これまで報告されている日本人のデータとほぼ一致した。MPT 下位尺度得点と遺伝子型との関連では、スキゾイディアの次元において、S 型 (s/s) の平均得点が L 型 (s/L+L/L) に比べ有意に高かった。

【結論】本研究では、統合失調症関連パーソナリティとセロトニン・トランスポーター遺伝子多型との間に相関が認められた。一方不安関連パーソナリティである神経症傾向との間に相関は見出されなかった。近年統合失調症の陰性症状がセロトニン系の機能不全と関連していることを示唆する報告があるが、陰性症状と統合失調症の病前性格との等価性が指摘されていることを考え合わせると、本研究の結果はこれらを支持する結果であると考えられた。

6 神経心理検査 アーバンズ (RBANS) を用いた精神疾患の認知機能評価

北村 秀明・染矢 俊幸

新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野

RBANS (Repeatable Battery for the Assessment of Neuropsychological Status) は、1998 年に米国の Randolph により開発された、種々の脳疾患に合併する高次脳機能障害を短時間で繰り返し評価しうる神経心理テストである。すでに統合失調症にも応用され、職業的予後を精度よく予測するという。今回我々は、現在作成途中の RBANS 日本語版を用いて、統合失調症と気分障害、アルツハイマー病における認知機能評価を行い、先行研究と比較検討した。

対象は新潟大学医歯学総合病院で治療中の患者 17 名で、全員からインフォームドコンセントを得た。対象を臨床症状が安定し、著しい意欲や注意の障害を認めない患者に限定して RBANS を施行